

## 丹賀砲台の爆発

祕められた修事の記録

会員 相良主殿

当時の丹賀国民学校長  
現住所 宮崎市西原上三丁目

今から二十九年前、私は鶴見半島の先にあたる丹賀国民学校に校長として赴任しました。その年、太平洋戦争が始まり、学校でも、すべてが戦時教育一色になつて未だ

し友。昭和十七年一月十日、軍服姿の将校八名が学校に来ました。

「今度大砲試射の為に要塞に来ましめたので、よろしく聞くところによると、無医村だそうですが、軍医も東古ので、生徒は病人でもどちら、慮慮なく申し出で下さい。治療してあげますから。」

と云ひました。その親切な言葉に私は、これから医者が身近にいて、安心できると思ひ、厚くお礼を申しました。

翌朝、要塞から使いが来て、

「今日、試射をするから、生徒を山の上にあせりて見学する旨を申す。ほんたうアス戸などは、全部はずして整理し、煙風で被損せぬように注意して下さい。」

と云ひて、急いでガラス戸をはずして廊下に重ね、戦車の上で、一發、二發と砲声が轟きました。四国の方角を見ると、遙か遠い海の上に、まるで、日本海海戦の絵で見ると、水柱が立ち上り、壯烈な光景でした。

やがて、試射も終つた機械なりで学校に帰り、私の席に着いたときに、物凄い音がしました。窓から顔を出して見ると、要塞の上は、真黒でした。学校の近くにも、疊一枚程の鉄板が飛んで来ました。それから何分かたで、ようやく駐在巡査が走つて来ました。

「学校の救急用薬品を全部持つて、すぐ私と要塞に来て下さい。」

と云ひて、早速、必要な品を取まどめ、二人で出かけました。

海岸には、着剣した兵隊が並び、一般村民は家から出ないよう指囲していました。私たちは、急いで行くよう指示され、現場にかけつけました。

それは思わず息がとまる情景でした。地面に倒れ散乱死した何人の将校や兵隊が横になつて並んでいました。頭の形がこわれている人もいたし、腋や脚のない人もいました。大部分の人は出血がひどく、既に殆んど死んでしまいました。

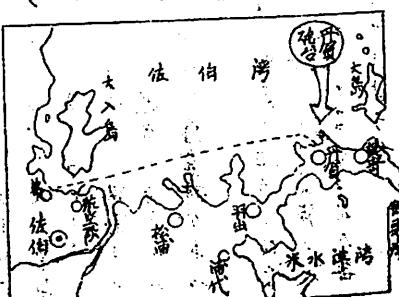
そこへ巡回船隼丸の人たちが走つて来ました。

「校長先生、早く船の方に来て下さい。」

と云うので、船着場に駆けつけて見ると、五十人あまりの兵隊が、若一兵もかきながらうめき声を立てていました。頭が半分に割れていました。急いで包帯をし、脈をとると糸のように生徒をつれて山頂上りました。

また、頭が半分に割れていました。急いで包帯をし、脈をとると糸のようにかすかに感じられました。カンフル注射を打とうとすると、

「自分はよいから、兵隊を救お。」



と手をふります。私は無理に一本打ち、次々と兵隊に打  
ち続けました。二ダースで私の手持ちは品切れになりました。

「兵金にまだないか。」

と私が呴びまし左。兵隊が、赤十字のマーク入りのトラ  
ンクを持って来ましたので、中からカンフルを取り出し、  
また次々に注射しました。何分にもこちらは一人、相手  
は七十人あまりですから、大変でした。一人の兵隊がア  
ルコールで消毒し、巡回がアンプルの口を切り、私が注  
射をし続けました。一通り手当も終つたので、船は出船  
することになりました。佐伯の海軍航空隊で治療を受け  
るためです。

その日は海が荒れて波が高く、頗死の負傷者を乗せて  
航空隊まで行くのは大変でした。どうか全員が無事に息  
のあるうちに航空隊に着いて、治療が受けられるようにな  
り、祈る心で一杯でした。

負傷兵を隊に引渡し、帰ろうとしますと、一人の将校  
が、「校長先生、今日は是非隊に泊つて下さい。」

と言いまし左が、私も学校が気になりますので帰り左いと申  
しますと、そんなら海軍の船で送りましようと、  
になり、帰りは航空隊の舟艇に乗りました。  
その頃から海は一層荒れはじめ、大じけとなりました。  
丹賀湾の入口に来ると、日はとつぶき暮れて、航行がお  
ずかしくなりました。

「校長先生、舟のへさまで、進路を教えて下さい。」  
と頼まれまし左。

「面能、取能の使い方も知らない。」

「古、左と言つてくれれば、こちらで何とかする。」

とのことで、私へ側には将校が一名、立つていました。  
私は真の間の中を、空を見左、山の形とすかして見左  
りして方角を定め、やつと方ことで丹賀湾に入りました。  
要塞の前着いた時は、生きがえつ左思ひがしました。

それから爆死者の遺体を海岸に收容し、木炭を下に、  
薪を上にし、石油をかけて火葬しました。

一夜明け、砲台に行つて見ると、主砲は半分位から折  
れ、中のゼンマイのような物が、附近に一ぱい散つて、  
寄り付かれない有様でした。火薬の力のすさまじさをま  
ざまざと見せつけられた思いがしました。

二ヶ月位たつて、西部軍より、司令官と參謀肩章をつ  
け左将校など、十名余りが津校に来ました。

「先日は、大変御苦労でした。」

と礼を述べ、感謝状をくれました。そして私が応急延置  
をし左兵隊が、全員無事だったと知り、大変嬉しく思  
ました。

(附記)

1. 負傷者を佐伯海軍航空隊に運んだのは水上警察船隼

丸で、当時乗船して居て血まみれの負傷兵を助けて  
船に乗せるのに加勢して下さつた人は、今大分市南  
太平寺に住んでいらっしゃる姫野宗人と言う方です。

2. 丹賀砲台はこれたまゝ今も残つております、鐵筋コン  
クリートの頑丈な要塞は、生々しい爆発の跡をその  
まま残して、その入口近くには立派な慰靈碑が建つ  
ています。

3. しかし内藤中佐以下の爆死者は、戦死と認められた  
ハカラガ、靖国神社にまつられて居らず、遺族のみ  
達に對し、國は殆んど何の手当もしていません。危の毒  
なことです。人のままであるのです。

兵遺族の内藤中綱夫人等、其の他の方々よりも未候が  
次々とおりました。

今県下に在住の遺族の方や、参拝方や親を来訪されま  
るので、委しく書きたいが何分にも老年で病床にあ  
るため、書くのが何よりも老年で病床にあ  
るため、書くのが何よりも老年で病床にあ

編集者添え書き

丹賀砲台の爆発事故は、原のまだ三十年も経つていい  
なりのに歴史的変遷の事実は、何と苦心精勤を極め、よく  
忘れ去らざりようとしている。このままでよいものであろ  
うか。

左また又相良氏から秋及三通の封書を見せていただき  
た。そぞはこの爆発事故の報付はとまなるもメテおのの方  
で、相良氏の説明を求めた上で差し、三氏、乞うて、差  
支言の部分と本誌に掲載させて頂くこととした。併せて  
お読み頂き、事故の真相とその問題点をつかむ資料とな  
ってほしいのである。へいすれも相良氏に宛て方との  
ハそのこ

大分市南太平寺四組 雅野 宗人氏より  
御言さん、案が付かない折、床下の手箱が、戦闘中の丹賀要  
塞の大爆発の夢想の資料を整理している事と大分合同新聞  
で詳見し感銘致ります。

其後病状はいかがですか。頑張つて完了して、優しく立派  
に歌われんことを願ひます。私は吉井大分県に在て丹賀要塞署勤  
務水兵派出所にて特折、監視、無取締りの爲め大分県  
近視細耳化粧品を常駐し、竜巣取締  
官は監視水道一月につけていたが、日没時度がよく音  
威も拡大された為か、軍の要請で軍隊の  
荷物を人と運ぶ仕事をして行く様になつて、左またまた瑞雲  
要塞爆発と自然當然に見落ちます。もう三年前、主  
と故おりよく記憶していませんが、思い出し左またまた瑞雲  
見ました。

思ひ出せ、昭和十七年一月の裏原松の森と恩子  
當時戰時体制は一線とは、げんぐ強化され、やや空氣の  
足摺岬の沖、沖ノ島に陸軍要塞司令部と個の命に、  
り、野砲一。陸大砲二門等、木造船に乗せて、其れを  
集丸で引いて行つたことがある。たぶんここも要塞  
にする方が走つたらいい。兵隊もかなり居たと思ふ。  
又佐田岬にも大砲や兵隊が居て、陸地を築築して、  
陸海軍司令部の要請により司令部の將校及憲兵食糧等  
と一緒に巡回を行つていたが、當日急に司令部より  
丹賀要塞に行つてくれと、言われ、常に乗る高野巡査  
部長が行つてくれないかと云われて、自分が行くこ  
とに至つた。

何が荷物と兵隊の憲兵だったと思つて、一人を乗せて司令部の横橋を八時過ぎ出發し、一路南下、晝少  
し過ぎたころ、丹賀要塞の岸壁に船を着け、ちょっとと  
したところ、突然大爆発音と共に真黒の煙が立ち上  
り、同時に船のカンパン上にもカンカンと音を立て  
て何が落不して来た。よく見ると火の団り、大き  
いもの日傘大のものが落ちて来た。これは太鼓打と直感し、  
積んでいた荷物を大急ぎに卸してしまふ。  
すると何人が兵隊が顔は真黒く焼け、着てゐる  
服は水色で、なん泣血まみれになり息も止え、左之  
人が次ぎから次々と要塞へ中から運び出されて來  
る。これまた度を、このままではいかんと思つてい  
がら、元気のある兵隊らしく、人かこんで来て、早く  
船に乗せてくれば、そうして一分でも早く佐伯航空隊  
の病院に送つてくれば、船員と一緒に、船員と一緒に、  
負傷兵を船のカンパン上に引き込んだ。みんな苦痛  
に顔を上げて泣いていた。まるで生地獄だつた。  
船上は負傷兵の血で一杯である。自分達も股も手

も血だらけになつて。十六、六名乗せた二万出港にて  
くれと言われ、一直線佐伯航空隊岸壁に向つて、全  
速力で海上を走つた。そして岸壁に着き、負傷兵  
を海軍航空隊の人に一人一人渡したが、自分達は岸  
壁より隊内に入れてくれないので、其のまゝ夕方出  
発して隼丸の寄港地に向こう。警察署の方もあまり  
遅いので心配していただい。

佐賀港に飯塚して前記の事を報告、翌日報告書を  
知るだけ書いて提出一友のであつた。

(中略)

作田市城原　吉　庄　シ　余民より

突然手紙を差し上さへて失礼をいたします。寒は十日付大  
分合同新聞の記事へ編者註と記載させていただきまして、取扱  
えます。併せてとりまつた。

御病床の御様子でござりますが、その後御病院の方は如何で  
ござりますか。仰察し申上げてます。

(註) 昭和十五年十月十五日朝刊の記事

(大分合同)

私は昭和十七年一月十一日、耳貸要塞で歿死し友  
一郎、中附植山一郎の妹でござります。

昭和三十年三月まで元県立佐伯高寺女学校に主人  
が勤めていましたので(註古庄　葉先生夫人)、一度へ歿  
事中、島に参りおり左が、今も忘れる事は出来ませ  
ん。

大きな声で該せず、耳の方向を指さしも出来な  
い時代で、ただお話をソーツとお聞きして、耳ぐ母  
を三々歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩歩

その後も行けない事と思ひ、とうとう最近おき  
らめて、只一月十一日の命日をお墓参りですませ  
います。

私共女の姉妹三人が残つてありますので、出来るだ  
け早く現地に行つて、お参りをしていと考えていま  
す。

太学校勤務時代の校長先生の奥様へ(宣前玉直井貞子様)  
とはお使いをして、三年前もお便りも伺ひましたのでござ  
ります。私共は八年九月二十日の水害や十九年の航空隊の空  
襲も西中の元中学校の道場裏の家で過ごしました。

(中略)

これよイ又だらくお寒くなつて参ります。十二号御養生  
書きます様に、そして今お書きの記録を出来るだけくわ  
くお書き出来る様にとお祈りいたします。(下略)

(中略)

横浜市　内　藤　静　子　氏　より

突然脚手紙さし上げ御無礼何卒——御赦し下さいます。  
中浦要塞爆発にて殉死いたしまー左故内藤大佐(当時中佐)  
の家内でござります。此の段当時の様子を新聞に発表して下さい  
れし由、主人の同郷の方の息子さんで九州石油におつとめの  
方よりおぞく新聞を送つて下さいました。

兼々秘密々々でほうむられ、私共には委い事は  
知らされず、何か割り切れ放思いで過つておりま  
す。三十年にちんなんとすの今日、おお左様の思召  
して、眞実を知る事が出来、有難く厚く御礼を申上げ  
ます。

現地に慰靈碑の建つてゐるところを最初で知りま  
す。戦時中の事ゆえの当然隣国に合祀されると思  
て居たまづ古が、(註)左側に通称新野(新野)方々  
へ車詔禁(新野)方面へ向。慰靈碑が建てられて

住吉大社参拜に寄せて

賛助会員 木田

（大阪市住吉区墨江東）

長

前の事は、私とて遠慮の方々に對する幾分でも神上共し  
整くなつた恩心で御ざいます。すれども神上共し  
されて下されし皆様の御靈を神懸めにと思ひますが、遠  
き離れ年と共に目も足も弱くなり、お恵みしまがら  
そなへば私の生活の上、今は一人暮しの身の上如  
何を生むが如く、大部分の方へお詫び御冥福を  
お祈りする毎日で御座ります。

本拠に於ける御靈をもかえりみる我等、埋  
葬のモモで此左事実を世の中に出して頂き、ただく感  
謝の外は御座ませぬ。有月難う御座いました。聞  
けばお寺方には、当時一考ならぬ御助勢下さいま  
せんが左由附乞主人は草葉の陰でどんなりが感謝中で  
御連絡を仰いでいるにとど存します。乞は皆様が代り厚く厚  
く御礼申し上げます。

（中略）

昨日の返事の中で、当時の事故で生き残る札幌方  
が牌を御守りして居られた方が、近頃御病気勝ちのま  
し、委しく且分りませんが、その方に若し何かの  
御連絡でも御ざりまじ左へよろしく（お手

（獨集者添え書）  
丹賀砲台の事故は、そーとその遺跡はみんなから忘れ  
去られようとしている。この歴史的な事実は文字にしる  
して後世に残さねばならぬ。幸いコンクリートで堅固  
に構築されている砲台の跡は、大部分そのままの形と  
どめ、物凄い修復の跡をとどめている。  
そして慰靈碑も建ててある。然し私は神元丹賀の方々  
どな左から更にわたく當時の記録を残して下さること  
を望んで、この紙面提供を考えている。

— (73-13) —

新春お目出と存じます。

新作お目に多く御返すお正月であります、余張り気分  
が新年にあります今年の区切りのつくるものです。

清々一々氣持ちで住吉大社に参拜しましたが、人の渴  
寒く中で祈念中、お賽錢で数回後頭部を叩かれ始末で  
お水まで。此の日住吉の森は、青赤、黒など五色の色  
口着飾つた善男善女、老いも若きも、と云つた姿で埋め  
つくされました。

私は思つた、この夥しい人達は、果して何を念じてい  
るのだろうか。單なるレジヤーの気持もあろう。祖先  
崇拜もあろう。追憶のめらかた災害、交通禍から、身分  
安全を祈願する意味もありうる。然し大凡の人は私達が異  
御にあつて久方振りに故郷へ墓参り帰るに似た気持では  
あるまいが、まだ何となくまづがまき、魂の寄りどころ  
を去ら左愛持ちではなかろうか。都會生活者及夫婦に情  
操に餓えを感じるとでも言えよう。都會邸舎の別なく最近  
は特に文教費を尊重し重視しはめたのも此の意味から  
左思う。左の事は、左の事で、左の事で、左の事で、左の事  
佐伯史談会が祖先の遺業を究明し、正一の豊南地方の  
歴史を伝えること假に御土人達に大きな心の糧を與え  
ることにもなると思います。

立増奉公の發展をお祈り致します。

（用）  
（獨集者添え書）  
丹賀砲台の事故は、そーとその遺跡はみんなから忘れ  
去られようとしている。この歴史的な事実は文字にしる  
して後世に残さねばならぬ。幸いコンクリートで堅固  
に構築されている砲台の跡は、大部分そのままの形と  
どめ、物凄い修復の跡をとどめている。  
そして慰靈碑も建ててある。然し私は神元丹賀の方々  
どな左から更にわたく當時の記録を残して下さること  
を望んで、この紙面提供を考えている。